

「全鍍連」 2021年 11月号 巻頭言

全鍍連 技術担当副会長 吉田 忠弘

(株)ワイエスデー 代表取締役)

「コロナ禍を経て思うこと」



最近、移動時間や仕事の合間など余白の時間ができた時、ふと考えるようになりました。身の回りの状況が目まぐるしく変化しているけれども、経営者として、企業として前に進めているのだろうか、何か新しいことを学んでいるのだろうか、と。以前であれば業界全体の向上や自社の経営、従業員の課題、地域との関わりなど、私ができることは何だろうと常々考えてきました。しかしながら、昨今は時代の移り変わりがあまりにも速く、意識して色々と学んだり知識を得られる機会を取りに行かなければ、乗り遅れてしまうのではと感じます。

そのように考えるようになったきっかけは、今なお猛威を奮っている「新型コロナ」への対応でした。瞬く間に世界中へ拡大してから、かれこれ 2 年弱が経過し、我々は今なお自粛を要請されている毎日です。コロナへの対応に追われ、せわしなく動き回るうちに、あっという間に時間が経過したように思います。この 2 年で私が経営を引き継いだ当初の想いを、どれだけ実現できたのだろうか、それに向けての活動が行えてきたのだろうか、そのように振り返ることが増えてきました。見方を変えると、一段落したわけではないにせよ、ワクチン接種の普及が進むなど、少しずつ考える余裕が出てきたのかもしれない。

コロナに翻弄されているうちに、時代の移り変わりは我々の想像を超える以上のスピードで進んでいます。我々めっき業界においても、自動車産業や工作機械産業を始めとした産業構造の変革に巻き込まれ、その存在そのものが問われる転換期にあると思います。大抵こういうことは、我々が気付いていない、見えていないところで進むと思います。例えば、SDGs への貢献を通じて地域とサステナビリティに関わる取組みを加速させることが強く求められていたり、上場企業の ESG 投資への対応が必要だったり、昨今では脱炭素対応に向けたサプライチェーンへの要請も求められるようになりました。2 年前とは大きく状況が違います。これまでのように、より良い製品を作って、取引先の皆様に多くの価値を提供することが第一、企業の利益を追求していこう、といったことに留まらず、企業経営の在り方そのものが問われるようになってきています。

新型コロナは「With コロナ」として長い時間一緒に付き合っていかなければならない状況になりつつあり、一企業で抗うことは非常に困難でしょう。その中でも、ようやく先の状況が見え始めた今こそ、少しだけ気持ちを落ち着けて、数年、またそれ以上先の状況を想像してみる。決して簡単に想像できるわけではありませんが、そのような時間をつくることで、また違った価値を企業の経営にもたらしてくれると思うのです。2021 年も終わりに差し掛かってきたことから、色々なことを棚卸

しして考えるには、良い時期なのかもしれません。

全鍍連の活動を通じて、また皆様とリモートではなくお付き合いできることが早く訪れることを願っています。